

カナダ日本語教育振興会

# Newsletter No. 34

Canadian Association for Japanese Language Education

ホームページ : <http://www.cajle.net>

June 1, 2007

## ———— 目次 ————

◆巻頭言	
ブログ・日本語の風景 .....	楊曉捷 1
◆年次大会	
「CAJLE 2007」へのお誘い.....	西島美智子 2
『赤毛のアン』の思い出.....	ライリー洋子 4
◆特集	
第18回全カナダ日本語弁論大会を終えて： 今後への課題と提案.....	下野香織 5
第19回BC州日本語弁論大会.....	大前典子 7
第25回オンタリオ州日本語弁論大会 .....	矢吹ソウ典子 8
第9回アトランティック・カナダ日本語 弁論大会.....	大江都 9
◆特別寄稿	
継承語教育におもう.....	鈴木美知子 10
◆リレー随筆	
私の日本語へのこだわり.....	青木恵子 12
◆活動報告	
活動報告とこれからの活動案内 .....	清水道子、畔上ラム智子 13
BULLETIN BOARD .....	大江都 16
編集部便り .....	17

## 巻頭言

### ブログ・日本語の風景

楊 曉捷

大学の春のコースを担当して、20名の学生を語学研修に東京へ連れて行くことになった。元気はつらつな学生たちには、調査や研究のプロジェクトを課す。若者たちはそれにはきちんと応えてくれる。そこで、勉強をさせるだけでは能がないと思い、半分学生たちの情熱にほだされながら、自分もなにかをやってみようという気になった。思いついたのは、インターネットで流行のブログだった。名付けて「日本語の風景」。

ブログとは何か、いわゆるホームページとはどう違う、とすぐ聞かれる。手短かく言えば、本質的な違いはないと考えてよい。あえて言えば、ホームページは人間あるいは特定のテーマを取りあげ、それについての体系的な情報なり知識なりをまとめて載せる。対してブログとは、ほぼ定期的な情報の追加を特徴とする。言い換えれば、前者は考え抜いたものを丁寧に構築して、それをいっぺんに公開するのに対して、後者は特定のテーマをめぐり、現在進行形に内容を付け加えていく。それから、読者の発言がそのまま公表できるのも、ブログの基本機能になっている。現実の中では、ブログを発信の場とする人が多く、Google、Yahooなどの大手のプロバイダーが提供するスペースやパターンをベースにして、驚くべき広範囲の、深みのある議論が交わされている。

その中で、わたしが選んだテーマは、仕事の対象である日本語である。言葉そのものだけを議論の対象にするのではなく、日本語の使用者、学習者、さらに日本語を第二外国語として習った経験者といった、複数の立場を交互に取ることにした。いわば日本語への観察や思考を通じて、日本語の豊かな表現、楽しい仕組み、場合によってはいささか理不尽な言い回しなどをメモ風に記していく。以上の考えを気軽に読んでもらえるように、一つひとつの項目には、テーマに沿った写真を添え、広がりを持つように関連のサイトを一つないし二つ選んだ。さらに自分のクラスの学生たちにもある程度意味が伝わるように、毎回二、三行の英語によるハイライトも付け加えた。

ブログとは、定期的書き出すものである以上、それを実践しようと思った。やや過酷だと承知しながら、一日一題を自分に課した。正直に言って、このような経験はこれまでまったく持ったことがない。はたしてそれが可能かどうか、それをこなすためには、どのようなリズムをものにしなければなら

ないのか、まったく未知の世界だ。でも、その分、スリリングな挑戦にも思えた。ただし、自分にはそのような決心が実行できるように、「六十日限定」という逃げ道を用意した。このブログを学生たちと一緒に旅行の土産にし、旅行が終わるころには終止を打つ、ということだ。たとえば言えば百メートル競走の覚悟で取り掛かる。競走には気力を搾り出すぐらいの苦勞がつきものだ。そこまでしても得るものは、もちろんあるはずだ。自分に観察や思考を促すきっかけ、そのような考えをおぼろげにも形に残しておく仕組み、そしてそれを他人と交流できる形で発表する場をもつこと、挙げてみればまずこれぐらいのことは言えるだろう。

ブログの大きな魅力の一つは、同じテーマに関心をもつ人々と交流できることだ。それは、毎日なにかと書き出しているわたしのささやかな夢でもある。皆様もどうぞお暇なおりにでも覗いてください。そして、「友情出演」ならぬ友情投稿を期待したい。

(日本語の風景 : <http://nihongo2007.blogspot.com>)

## 年次大会

### 「CAJLE 2007」へのお誘い

大会実行委員長 西島 美智子

長い冬も終わり、ここカナダにも春がやってきました。みなさま、いかがお過ごしでしょうか。

すでにお知らせをご覧になった方も多いのではないと思いますが、今年の年次大会は、カナダ東部にあるニューブランズウィック州で行うことになりました。カナダの地図を広げていただくとお分かりのように、大西洋沿岸のアトランティック・カナダ諸州は、北米大陸の東のはずれにあり、日本からは

るかに遠いところにひっそりと存在している、という感があります。私が CAJLE の会員になったのは、ニューブランズウィック大学 (UNB) に来た翌年の1995年で、その年は、モントリオールで大学部門の研究発表会がありました。2001年度から三年に渡り、会長を務めさせていただいたご縁もあって、これまでも、研究発表会や年次大会をニューブランズウィック大学で行ってはどうか、というお話を受けた

ことはあったのですが、正直なところ、実現できるようになるとは思っていませんでした。一昨年の大会が、カナダ西端ともいえるビクトリアで行われ、それを機に、今度は東端の地で、という声が上がってきました。何事にも、勢いというものがあるのかもしれない。時を同じくして、CAJLEのアトランティック部会も立ち上げ、さらに、現会長の大江都氏が、同じくニューブランズウィック州在住という好機を得て、今大会を開催する運びとなったことを、大変嬉しく思っています。

今大会のテーマは、「今の日本語-そしてカナダにおける言語教育の今」です。その一つの柱として、今、日本語がどのように変わってきているのか、実際に使われている日本語を、日本語教育の現場でどのように扱っていけばよいか、ということを考える機会にしたいと思います。教師研修会では、社会言語学がご専門の井上史雄先生（明海大学）に、方言、若者言葉、敬語などを中心に、現代日本語の多様性についてお話していただきます。特に、日本国外で日本語教育に携わっていると、こういったお話を伺える機会がほとんどないので、大変楽しみです。また、昨年につき、国際交流基金のご協力により、アルバータ教育省の室屋春光先生を派遣していただくことになりました。室屋先生には、現在、国際交流基金が開発を進めている「日本語教育スタンダード（仮称）」、カナダにおける日本語教育のための「カナダ版日本語教育キット（仮称）」についてのお話をお願いしました。

さらに、今大会ではパネルディスカッションを設け、「今の日本語と日本語教育」というテーマで、ディスカッションを行う計画です。パネリストには、井上史雄先生、宇佐美まゆみ先生（東京外国語大学）、川口義一先生（早稲田大学）をお願いし、さまざまな角度からお話を伺うと同時に、パネリストの方々、そしてフロアの参加者の方々との活発なディスカッションへと発展することを期待しています。司会は、

CAJLE 前会長の王伸子氏にお願いし、ご自身の専門からのお話も交えながら、リーダー役を務めていただく予定です。

もう一つの柱として、「カナダにおける言語教育の今」を取り上げます。昨年、トロントでの大会で、「岐路に立つ日本語」についての基調講演をしてくださった、太田徳夫先生（ヨーク大学）においでいただき、先生が手掛けておられ、すでにアトランティック・カナダの大学との間で始まった、日本語遠隔教育についてお話していただきます。中・上級の日本語コースを独自に開設することが難しい大学において、今後の可能性を考える上で、大変興味深いものと思います。

そして最後に、ニューブランズウィック州における、第二言語教育をご紹介します。カナダ国内で唯一、英語とフランス語の二言語を公用語とする州であるニューブランズウィックでは、独自の第二言語教育を展開しています。ニューブランズウィック大学・第二言語教育研究所の教授二名にお願いするデモンストレーションを含めたお話は、カナダにおける第二言語教育について考える、よい参考になるものと考えています。

さて、ここまでお話してきた内容だけでも、とても充実した大会になることがお分かりいただけると思いますが、この他にも、まだまだたくさんのプログラムがあります。例年のように、研究論文発表も行われます。カナダ、日本、アメリカなどから24名の発表者が集まり、日本語および日本語教育に関わる理論的考察や実践報告、教材開発などを発表していただく予定です。とても刺激になり、勉強になるものと、楽しみにしています。また、日本語教育に関係する出版物や教材の展示販売も、例年通り行う予定です。

もちろん、いつものように、お楽しみも用意しています。二日目の懇親夕食会では、アトランティック・サーモンを召し上がっていただきながら、参加

者の方々と歓談し、交流を深める機会としていただきたいと思っています。さまざまな「催し」も企画していますので、どうぞご期待ください。そして、ハイライトは、何といても、プリンスエドワード島（PEI）への一泊見学ツアーです。地図で見ると、米粒ほどの小さな島ですが、実際にまわっていただくと、その広々とした土地に驚かれることと思います。お馴染みの「赤毛のアン」ゆかりの地であると

同時に、大変美しい風景や海岸線は、アトランティック・カナダならではの醍醐味があります。是非、この機会をお見逃しなく！

詳しい大会のご案内は、すべて、CAJLE のホームページでご覧いただけます。（[www.cajle.net](http://www.cajle.net)）  
では、開催地のフレデリクトンでお会いするのを楽しみにしております。

## 『赤毛のアン』の思い出

ライリー 洋子

アン の生地への旅行を含む今年度のCAJLEの学会に先立ち、『赤毛のアン』に関するコラムを設けようと私は発案した。どなたかが『赤毛のアン』に関するすてきなエッセイを応募して下さるかと思いを長くして待ち受けていたが、締め切り過ぎても何の音沙汰もなかった。言い出した私が、一筆する責任を感じたので、昔シャーロットタウンの劇場で、『赤毛のアン』を見た思い出を書いてみよう。

もう20年ほど前になるであろうか。当時トロントに住んでいた私どもに、主人の勤めていた会社の本社がカルガリーに移転するので、引越しの準備をするようにという命令が届いたのは。西部に引越す前に子供たちにカナダ東部を見せておきたいと、その夏、モントリオール、ケベック、ニューブランズウィック、ハリファックス、PEIへとトレーラーをひいて旅立った。最後の目的地であるPEIに着いたときには、どしゃぶりの雨で、時間つぶしに、『赤毛のアン』の劇を見ようということになった。シャーロットタウンの劇場のキップ売り場は大変な人ごみで、キップは全て売り切れの状態であった。当時すでに劇場のキップの有無はコンピュータ化されており、目の前の画面にキャンセルの文字が現れ

る否や、人ごみでうろうろしていた私たちの名が呼ばれ、4人の席が、取れたと知らされた。

キップの売り子さんから、「今夜は『赤毛のアン』千回演出記念のギャラなので、皆さんドレスアップをして来ますが、旅行者は気になさらないように。」という親切な忠告をうけた。ぬれたレインコートにジーンズという我々に同情して、そのような忠告してくれたものと思われた。トレーラーに戻り、シャワーを浴び、それぞれトレーラーを引いた旅行者が身に着けることのできる最上の装いを凝らして劇場に向った。

タキシードとイブニングドレスに溢れる劇場を小さくなって歩いたあの夜をなつかしく思い出す。シャンデリアの明かりが煌々とした劇場は、土砂降りの外と異なり、優雅であった。

自分たちの着ているものの事など思いもおこさせぬ見事な千回目の『赤毛のアン』の上演であった。当時小学校四年と一年の娘も息子も、すでにこの本を読んでおり、楽しい劇に笑い転げていた。

戦後幾年、自己の発言を極力つつしんできた日本人読者にとり、天真爛漫かつ自由奔放な想像力、前向きな姿勢で事件の解決に臨んだアンは全く新鮮な

存在であった。アンの持つ豊富な想像力、感情表現、暖かく、また同情を呼び起こす性格、前向きな姿勢、他人に対する思いやり、そして自然の美しさをこよなく愛する性格はたちどころに日本人を魅了した。日本人に欠けていた点を満たすと同時に、日本人が兼ね備えていた性格をも共有するアンを日本の読者は大手を広げて迎え入れたのであろう。外国および外国人への触れ合いが希薄であった当時に外国に対する珍しさに充分に対応してくれる本でもあった。

五年程前、訳者村岡花子女史のお孫さん、みどりさんのセミナーに出席した。新築された大森にある

村岡花子女史の小さな書斎で、みどりさんはカナダ的な美しい食器で紅茶や手作りのケーキを準備してください、大変興味深い彼女の祖母の話をしてくれた。

1907年に初出版の『赤毛のアン』は今年で丁度百年になるわけである。時代は変わり、アンの生地も変わったことであろうが、天真爛漫、かつ自然の美をこよなく愛する『赤毛のアン』は普遍であり、今でも「輝く湖水」の水は輝き、「歓喜の白露」には今頃白く美しいりんごの花が咲いていることだろう。

## 特集：日本語弁論大会

### 第18回全カナダ日本語弁論大会を終えて 今後への課題と提案

アルバータ大学 <sup>かばた</sup> 下野 香織

第18回全カナダ日本語弁論大会は2007年3月31日にアルバータ大学の主催で開かれた。早いものですでに1ヶ月以上が経ったことになるのであるが、今振り返ると、無事に終わらせることができたことを感謝するとともに、今後の課題をいろいろと考える機会が多くあった。この記事を通して、私の経験と、私個人の意見ではあるが、今後への課題を述べさせていだきたい。そして、日本語弁論大会全国大会をこれからも継続するだけでなく、その内容を高めていくための材料としていただけると有難い。

私の経験から、弁論大会主催にあたりもっとも大切だと感じたことは、当たり前だと思われるだろうが、早く準備を始めることである。具体的に言うと、7月末には総領事館と連絡を取り始め、組織委員会

を構成し、11月までに日程や会場の手配、開催要項の作成と公示、1月にはホームページの作成と、各地方大会の組織委員会が準備を始める頃には全国大会の大まかな開催内容がきまっていた。早く準備を始めたことは、大切なことを見逃がす心配なく大会に臨めただけでなく、総領事館をはじめ大学や他団体・企業からの援助もいただけて、いろいろな意味で、大会を成功させるための要点である。

また、役割分担を早い時点で決めておくことも大会成功への秘訣であると思う。今回の全国大会主催に当たっては、3人の方が直接あるいは間接的に補佐をしてくださったのであるが、予算とそれぞれのアシスタントの長所や経験を考えて、役割分担を考えたことが大会の成功につながったと信じている。

大会の当日は、3人の有能なアシスタント達が、準備をしっかりとしてくれ、その上、ボランティアたちが効率的に働いてくれたおかげで、学生の出迎えからレセプションにいたるまでスムーズにことが進んだ。このボランティアたちを指揮することがアシスタントのうち一人の役割であったことはお察しのとおりである。

このように書くと、全国大会の主催が大変だったように感じられるかも知れないが、私がこのニュースレターで強調したいのは、実は、いかにして全国大会を大変でなくするか、という点である。今回の全国大会に出場した学生から次々と届いた礼状や、アンケートの結果から、全国大会がカナダにおける日本語教育に非常に有意義なものであり、学生たちの学習意欲増進にもつながっていることがわかる。しかし、近年、国際交流基金からの助成額も削減の方向にあり、同時に、近年全国大会の主催希望校がここ数年非常に少なくなっているのも事実である。この現状をなんとか打破し、カナダ中の大学が交替で全国大会を主催していくことで、全国大会、そして地方大会のさらなる活性化につながれば、と考えるわけである。

具体的な提案をする前に、まず、なぜ、主催希望校が少ないかについて考えてみたい。これには、(1) 人手が足りない、(2) 大学や企業からのサポートが受けにくい、あるいは受けられる確信がない、などの理由が挙げられるかと思う。かく言う私どもアルバータ大学の日本語プログラムも、2年ほど前まではこれら両方の理由で全国大会主催に尻込みをしていた状態であった。実際、国際交流基金への申請書の

準備にしろ、主催に当たっての企業や団体との連絡にしろ、一度目は大変であるし、ましてや、授業で手一杯の状態だと尻込みをしてしまうのも無理ないように感じる。

しかし、現実として、各プログラムの状態が簡単には変わることはない。それよりも、今の状態でも大会主催ができるように、工夫をすることが大切なのではないかと考える。その第一歩として、私はまず、全国レベルの組織委員会をつくることを提案したい。全国大会参加大学あるいは日本語プログラムから4～5名が代表して、組織委員会を構成し、国際交流基金への申請準備や協賛団体との交渉を分担して行えば、主催校の負担は随分楽になるのではないだろうか。それと同時に、大賞や参加賞を含む入賞賞品が毎年定期的に提供されるように企業団体と交渉していくことも必要かと思う。実際、今回の弁論大会において賞品や賞金を提供して下さった企業はこれまでも毎年何らかの形で援助を下さっているので交渉しただけでは援助の定期化も不可能ではないと思われる。

そのほか、弁論大会のウェブページを共同で維持していくことも、主催校の負担軽減につながるだろう。同時に、地方大会の情報も同じページからリンクできるようにすれば、全国レベルでの弁論大会の情報交換にもつながり、さらには学生の参加を促すことにもなるかと思う。

このニュースレターを読まれている先生方の中に私のこの提案に賛同して下さる方が何人かいらっしゃることを願っている。是非、これを機会に意見交換を行いたいものである。

## 第19回BC州日本語弁論大会

サイモン・フレーザー大学 大前 典子

第19回BC州日本語弁論大会は、今年3月17日、春の小雨の降るなか、サイモン・フレーザー大学で開かれました。

BC州の日本語弁論大会は、1989年にブリティッシュ・コロンビア大学アジア学科の校内大会として始まり、数回にわたる運営形態の変遷を経て、現在は、BC州およびユーコン準州の日本語学習者（高校生、大学生、一般）を出場対象者にした「地方大会」となっています。運営形態の変遷は、まず、ブリティッシュ・コロンビア大学日本語部門がバンクーバー近郊のカレッジからも実行委員を募ったことに始まります。80年代後半から90年代前半にかけてのBC州での日本語教育の広がりはめざましく、それにともない、実行委員会も大きなものに成長していきました。10人ないしは20人という出席者の当時の委員会は、文字どおり、熱気にあふれていたと言えるでしょう。

委員会の構成は、しかしながら、第10回大会を前に、委員数を数人にしぼるといふ大きな変化をとげました。大きい委員会には大きい委員会の、また、小さい委員会には小さい委員会の、長所と短所があると思われませんが、この改変は、カレッジからの委員会への参加が限られたという点で、必ずしも好評ではなかった、と言えます。

このような状態が数年続いた後、2005年の第17回大会は、ブリティッシュ・コロンビア大学日本語部門内の人員構成変化にともない、新しい実行委員長のもとに開かれました。現在の運営形態は、その時の形態に発したものです。現在、BC州の日本語弁論大会実行委員会は、ブリティッシュ・コロンビア大学日本語部門の日本語コーディネータであるチャウ氏と、サイモン・フレーザー大学の私、大前と

が共同委員長(Co-Chairs)を務め、在バンクーバー総領事館の文化担当領事とその秘書の方に加わっていただいています。

この実行委員会は、第18回大会準備にあたり、募集要項の見なおし、書きなおしを行いました。特に話し合いに時間をかけたのは、前々から問題となっていた、全国大会のとは少し異なる出場資格でした。いろいろ検討した後に出した結論は、BC州の出場資格基準を変える必要はない、ということでした。その理由は、BC州で使われている出場資格基準は、BC州の教育実状に則っているのだから、BC州内で使用するには最適のものである、ということ、そして、BC州から全国大会に出場しようとする者が、全国大会の出場資格に抵触して出場を拒否されるのは、学習時間の計算上、机上では考えられないこと、のふたつです。また、BC州大会においては、出場資格は学習時間数に厳しくこだわるとはならず、出場部門を出場者の能力に応じて決定すること、が確認されました。BC州の日本語弁論大会は、その誕生より18年間、毎年ブリティッシュ・コロンビア大学で開催されてきました。今年の第19回大会は、ブリティッシュ・コロンビア大学以外の地で初めて開催された、ということ意義のある大会だ、と思います。私は、そんな大会開催の一力になれて幸せだ、と思っています。

最後に、BC州の日本語弁論大会のほぼ20年間にわたる成功は、各方面の多くの方々のご尽力によってはじめて可能であったことを、付け加えておきたいと思います。

## 第25回オンタリオ州日本語弁論大会

ヨーク大学 矢吹ソウ 典子

オンタリオ州日本語弁論大会は、本年度で第25周年を迎えた。トロント大学成人教育課の主催で丸岡あき子先生と岩井つね子先生が中心になり、十数名の参加者で始まった大会であるが、現在では、さまざまな団体や一般の方々の協力を得て、五名の実行委員により準備・運営され、各校からの参加者数を制限した上でも毎年50名前後の応募がある。オンタリオ州で日本語を外国語として勉強している学習者と日本語教育に携わる関係者にとって、本大会は日本語能力試験と並び重要かつ不可欠な行事となっている。

今年の弁論大会は、3月10日（土曜日）の午後、トロント大学構内のメディカルサイエンス・ビルディングの講堂で行われた。初級15名、中級16名、上級9名、オープン10名、聴衆は約200名という、盛況なイベントとなった。審査は、マクマスター大学のティーセン教授を審査委員長とし、政府関係、一般企業、コミュニティー、メディアのそれぞれより合計5名の審査委員に、50名あまりの参加者のスピーチの評価という重要な役目に挑んでいただいた。ステージはカナダ・日本の国旗と小原流トロント支部の溝口豊道氏による生花で華やかに飾られ、パワーポイントのスライドで、大会の進行状況や各スピーチの発表者と題名等を刻時表示しながら行われた。

実行委員長の開会の挨拶に続いて、川上在トロント日本国総領事よりご挨拶をいただいた後、初級の参加者の発表が始まった。最初は緊張の表情を見せていた参加者が、だんだん会場の雰囲気慣れ、それまで練習に練習を重ねたスピーチを、身振り手振りを入れ精一杯披露して会場を沸かせてくれる。続いて中級の発表。毎年のことながら、中級のスピーチのレベルの高さには驚かされる。休憩の後、上級・

オープンと続く。今年の傾向として、高い部門の参加者が例年に比べて多くなっており、日本語の勉強を長く継続している学習者が増えていることがうかがわれ、喜ばしいことだと思われた。スピーチの内容は、日本の伝統芸能からマルチメディア時代の話題にいたるまで多岐にわたり、日本の歌あり、お笑い芸あり、切り口の辛い社会批判あり、観客を休まず楽しませてくれる数時間となった。審査の結果を待つ休憩時間には、日本は岐阜県の郡上八幡踊りのプロモーションのためはるばる来場した、郡上八幡観光協会の皆さんによる踊りが披露され、会場をにぎやかにしてくれた。いよいよ入賞者の発表。各種特別賞から始まり、各部門の三位、二位、一位と発表されて、拍手喝さいを受けてステージに上がる参加者の笑顔がまぶしい。最優秀賞は能についての考えをまとめた初級のアシュリー・ビソネットさん（ウォータールー大学）、優秀賞は落語についての思いと経験を語った中級のヴィヴィアン・シュさん（ヨーク大学）に決定し、入賞者全員でにぎやかに記念撮影をして終了した。

トロントで開催される大会の利点の一つとして、トロント日本国総領事館と国際交流基金からの協力に加え、地元の諸団体や企業より多大な支援を得られることが挙げられる。入賞者に対する豊富な賞品や奨学金及び大会運営費等の援助がある上、いくつかの企業からは、参加者の今後の就職先や日本とのつながりについての問い合わせがあったりし、日本語を学ぶ学習者に対する一般の方々の興味のほどがうかがわれる。

この大会に参加したことで、日本や日本語に対する関心がさらにつのって、それが参加者のそこからの人生に大きな影響を与えたというエピソードも少



なくない。これからも、オンタリオ州日本語弁論大会がさまざまな団体や人々に温かい協力を受け、日

本語学習者が重要な目標として励みにできるイベントであり続けることを願っている。

## 第9回アトランティック・カナダ日本語弁論大会

マウント・アリソン大学 大江 都

今年も例年のごとく、三月半ばに、アトランティック・カナダ日本語弁論大会が開催されました。マウント・アリソン大学が主催校となり、四大学から約24名の学生が参加しての大会でした。実は、開催予定日の前日、なんと雪嵐の予報が出たため、関係者一同大慌て。参加者の大半は、遠方から数百キロをドライブして来ますから、急遽話し合いの末、開催日を翌日へ延期しての大会となりました。参加学生数は多少減り、また、レセプション・ランチの「のり巻き」が少し渴き気味になりましたが、同行の先生方も審査員の皆様も予定変更に対応してくださり、無事遂行の運びとなりました。皆でなんとか集まった、という思いから、いつにも増して和やかな会であったかもしれません。

ニュースレターですでに数回ご紹介しておりますが、カナダの大西洋岸四州——ニューファンドランド・ラブラドル州 (NL)、ノバスコシア州 (NS)、プリンス・エドワード・アイランド州 (PEI)、ニューブランズウィック州 (NB) ——には、現在日本語講座を持つ大学が七校あります。これらの四州をひとつにまとめ、1999年に、第一回アトランティック・カナダ日本語弁論大会が開かれました。以来、カナダの他地域同様、弁論大会は年中行事となり、今年で9回目を迎えました。マウント・アリソン大学が第一回、第二回の大会を主催しましたが、以降は、セント・メアリーズ大学、そして、昨年より、ニューブランズウィック大学が主催校に加わり、現在は、三大学が交代でホストとなって開催しています。残

念ながら、地理的な距離の問題、その他の理由で参加できない大学もあり、現実には、上記の主催校にセント・トーマス大学が加わった四大学が、通常の参加校となっています。しかしそれでも、参加学生数が、当初の十数名から現在の30名前後（今年度は開催日変更のため少ない）という規模に発展したことを考えると、大きな進歩といえるでしょう。

主催校となって毎回頭を痛めるのは、諸経費（運営費、賞品など）の工面です。特に、国際交流基金から賞品の援助をいただきますが、ここ数年その援助額が減り、他からの支援で補わなくてはならない状況となりました。幸い昨年に続き、今年度も三井カナダ社から、高円宮日本教育・研究センターを通して助成金をいただき、誠にありがたい限りでした。マウント・アリソン大学では、その他、日本語講座の行事のために特別な口座を設け、地域の民間企業などから支援金を募って、遠方から来る参加学生、先生方に交通費を支給するようにしています。

さて、こうした背景のアトランティック・カナダ地区大会ですが、参加した学生たちの評価はどうでしょうか。うれしいことに、毎年「素晴らしい経験であった」という声をたくさん聞きます。他大学の学生、先生方と出会うことが、まずは楽しい経験に違いありません。何よりも、「母国語ではない日本語で、自分を表現することのチャレンジ」を素晴らしいと感じる学生が多いようです。語彙も文法の知識も限られた中で、自分の思いを綴ることは、知的なエネルギーを多大に必要とする作業です。書いた原

稿も、スピーチの段階ではすべて暗唱しなくてはなりません。初級レベルの学生にとっては、これがまた難しい。種々の表現力を身につけた上級の学生であれば、一語忘れても他の語で置き換える、ということもできますが、初級ではその置き換えができません。こうした難しい課題にチャレンジし、発表の場に立つという経験は、それだけに、掛け替えのない

もののようです。

弁論大会は、一年に一度の行事ですが、一生懸命になって参加した学生たちにとっては、大学生活の大きなハイライトになるのでしょうか。これからも、楽しく充実した会となるよう、他大学と共に努力を続けていきたいと考える次第です。

## 特別寄稿

### 継承語教育におもう

鈴木 美知子

世に国語教育、外国語教育などと言われる名称は、文字どおり一見してその内容を判断するのにさして難しくはない。が、「継承語教育」となると、初めて耳にしたときは、きっと一瞬、判断に迷う感を持つのではなからうか。

まだ「継承語」ということばもなく、私には子どもたちの日本語教育に対して、まるで認識も知識も無かった30年余の昔、トロント日本語学校内に戦後移住者有志たちによって「国語教室部門」が誕生した。その入学案内を手にした折も「国語教室」という名称に何の違和感も持たなかった。それどころか具体的な名称だとさえ思いながら、6歳と7歳になったばかりの息子たちを入学させたのであった。

その翌年だったであろうか、多様文化主義が盛んにうたわれだし、州政府も Heritage Language Program を導入し、Heritage Language ということばをよく耳にするようになったが、どうも、もう一つピンとこない。「文化遺産としての日本語」などといってみても、では、「国語」とどう違うのだろうかという疑問がわく。

息子たちを通して日本語学校の学習状況を見ていても、やはり、何故かわからないが、彼等にとって日本語は国語と同じとは言い切れない気がしてならなかった。そんなある日、理事会はトロント大学の中島和子先生を招き保護者勉強会を開いた。先生は、移住地で子どもの日本語を育てるための知識や心得をお子さんの例などを引かれながら分かりやすく説明してくださった。

外国にあつての日本語は、放置しておくならば3代にして消滅する運命にあるとか、子どもに日本人に通用する日本語を受け継がせるためには、女子の場合は12歳くらいまで、男子でも14歳くらいまでに基礎をしっかりとさせる必要がある、等々、、、伺いながら、まるで目から鱗が落ち、心のもやの晴れる心地がした。この日以来、すでに7歳と8歳になっている息子たちの日本語の行く末に、「時すでに遅し」ではないかと危機感を強くし、継承日本語育てに真剣に取り組んだのである。

この中島先生が「Heritage Language」を「継承語」と名づけられたときもその簡潔さに感動し、これ以

上の表現はないだろうと思ったものである。

子どもの言語生態研究をなさり、『感情教育論』1983（学陽書房）を執筆された玉川学園大学の故上原輝男教授は、継承語を「血の呼ぶ言語」と説いておられた。

私は常日ごろ、保護者勉強会の折や卒業生に贈る言葉に、「ご先祖さまからの宝物」という表現をもち、「育てなければ育たないことばであり、頭（知識）ではなく、ハート（感情）で育てる（あるいは、学ぶ）ことばですよ」と補足もしてきた。

継承語教育というのは、保護者がご先祖さまから引き継いだ大切な言語遺産としての日本語を我が子に引き継がせ、継承した日本語を鍵として自分のルーツである日本文化の宝庫を開いて欲しいという親の切なる願いに支えられたことば育てであり、子ども本人がその気になったとき、自力で学びを深めていけるだけの基礎力を得させてあげたいことば育てであり、同時に人格育て、アイデンティティ育てでもあるとおもう。

それゆえ、教師が精いっぱい孤軍奮闘してみても、保護者の理解と協力（家庭での日本語育て）抜きにしてはその成果が今一つはかばかしくない。が、保護者が学校側の意図を正しく理解し、家庭での実践を努力される場合、たいへんな成果をもたらす例にもたくさん出会って来た。本当に「継承語」とは育てなければ育たない言葉だとおもう。

オンタリオ部会の活動として、講演会を通し継承語教育の啓蒙運動を始めて3年目の昨年（2006年）10月、講演会に祖母となられた一世の方や日本語学校の卒業生の参加があり喜び一入、おおいに励まされた。親となった2世の日本語学校卒業生たちや、

その親である祖父母となられた一世の方々が3世の日本語育てに本気で取組まれるならば、きっと継承日本語は消滅に向かうのではなく、3世たちにりっぱに引き継がれることだろうと夢が大きくふくらむ。

私も1歳になろうとする孫を持つ身である。息子夫婦の希望で誕生以来、トライリンガル話者育てにジジ・ババ二組も積極的に協力している。父親の日本語、母親の中国語を二つの継承語とし、かつ、コミュニティセンターのプログラムにもあれこれ参加し、英語にも触れつつ育てている孫の最初に発することばは、果たして何語だろうかとの興味の尽きない今このごろである。

---

#### 執筆者のプロフィール

1979年トロント国語教室日本語学校教師就任、6年間学級を担任。その間、1年間校長代行兼任2回。1985年から校長を9期18年務め、2003年に任期終了し引退。この間1988年～1996年トロント市教育委員会継承語日本語プログラム・アドバイザーとしてプログラム傘下校教師へのアドバイザーを兼任。且つ、1988年に発足したカナダ日本語教育振興会では役員を勤め、オンタリオ部会責任者として日本語教育の振興につとめる。著書：『継承語としての日本語教育ーカナダの経験を踏まえてー』（編著、1996年CAJLE）、『子どもの会話力の見方と評価ーバイリンガルテスト（OBC）の開発ー』（執筆協力、2000年CAJLE）『家庭でバイリンガルを育てるー継承日本語教育の立場からー』（実践編執筆、2006年、東ミシガン大学）

---

## リレー随筆

## 私の日本語へのこだわり

クイーンズ大学 青木 恵子

オンタリオ州キングストンという片田舎で日本語を教えている私は、常に「本物らしさ」を意識しながら、特に自分のジェスチャーや発する言葉が英語っぽくならないようにしながら、授業で日本語を使うようにしている。なにしろ学生の受けるインプットは限られているのだ。学生が日本語だと信じていたものが現場で通じなかったり誤解のもとになっては困る。毎日の日本語教室は、学生が日本で（或いは海外の日本語環境で）遭遇するであろう場面の予行演習の積み重ねのようなものだ、と私は思っている。

「毎朝漢字クイズがあって大変です」と学生が嘆いた。みなさんならどう反応するだろうか。「でも漢字は大事だから毎日少しずつ勉強した方がいいんですよ」と返すだろうか。日本で夏期コースを教えた時のことだ。学生がこう愚痴をこぼした時、英語を解さないホストファミリーのお母さんは「クイズなら楽しいからいいじゃない！」と叱咤したらしい。キョトンとした表情の学生が目に見て浮かんで気の毒に思えた。ここには小さな行き違いがある。日本人の一般的な感覚では「クイズ」はゲーム感覚のなぞなぞだろう。しかし学生の意味したものは「漢字の小テスト」だったのだ。他にも、ホームステイを始めて間もないある朝、青白い顔で「僕、病気なんです。」と告白してホストファミリーを慌てさせた学生もいた。「気が滅入った」ぐらいのつもりで、“I'm sick”と言いたかったのだろう。作文に「週末にホストのお兄さんと出かけました」と書いてきた者もいた。英語に詳しくない日本人は「ホストクラブの男性と?!」と勘違いするかもしれない。しかし、こ

れは単なる host brother の直訳だった。

英語が前提にある環境では普通に通じる言葉でも、日本では通じなかったり、違う意味に受け取られる場合がある。これを肝に銘じ、日本で一般的でないものは学生相手に発する言葉としては使わないようにしている。初日から handout は「プリント」、hiragana quiz は「ひらがなテスト」と呼ぶ。Grammar class は「文法」の授業だ。決して「グラマー」ではない。学生が自分のホストファミリーに「青木先生は**グラマーの先生**です」と話している場面など想像すると冷や汗が出る。日本人の頭の中では「**グラマーな先生**」(glamorous teacher)と解されるに違いないのだ。「**文法の先生**」(grammar teacher)ではなく。

とは言っても、徹底はなかなか難しい。appointment は最近日本語でも「アポイント(メント)」と言うらしいが、office hour という言葉はまだ一般的ではない。「面会時間」と言ったらなんだか病院のようだ。「週末、ダウントウンで買い物をしました」の「ダウントウン」はどうだろう。こういう場合日本語では「渋谷」とか「原宿」とか地名を言うから、それにならってストリート名で言わせるべきだろうか。などなど、ここで学んだ学生が将来独り立ちして日本語で意思疎通をする日のために、単語という基本的なレベルから私はあれこれ頭を悩ます。JFL 環境からすれば「ダウントウンで買い物をしました」で通じればいいじゃないか、とも思う。そんな訳で、いい日本語が見つからない時は、誤解を招きそうなものでない限り英語をカタカナにして使っている。これも曖昧な基準ではあるが・・・。

と、私の雑談はこれぐらいにして、次の方にバトタッチをしたいと思います。カナダ日本語教育界の若手（と勝手に期待！）、トロント在住の高崎麻由さんです。数年前に留学先のフランスからキングストンを訪れていた時に知り合い、それ以来のお付き合いです。フレッシュな視点からのお話を楽しみにしています。どうぞよろしくお願いします。

---

#### 執筆者のプロフィール

1990年カナダ留学中に日本語教育に興味を抱く。その後、国際交流基金 JALEX プログラムに参加し、テキサス州オースティンの高校で教える。ウィスコンシン大学で日本語言語学を学んだ後再び渡加、ノバ・スコシア州セント・メリーズ大学を経て、2000年から現職。夏は北海道国際交流センター、ミドルベリー大学の集中講座でも教える。趣味は読書とイギリスのロック。特にザ・スミスの大ファン。

---

## 活動報告

### 活動報告とこれからの活動案内

#### 活動報告

##### 『ジャーナル CAJLE』（桶谷仁美）

ジャーナル CAJLE 第9号は、厳選な審査の結果、8本の投稿論文のうち3本が採用決定した。査読委員会の先生方は、牧野成一先生（プリンストン大学教授）、曾我松男先生（ブリティッシュ・コロンビア大学名誉教授）、川口義一先生（早稲田大学教授）、上野善道先生（東京大学教授）、野呂博子先生（ビクトリア大学準教授）、金谷武洋先生（モントリオール大学準教授）の6名。第9号は今年度の年次大会で会員に配付される予定。

##### 2007 年年次大会準備経過報告（西島美智子）

2007 年年次大会は8月21日（火）～23日（木）の3日間、ニューブランズウィック州のフレデリクトンにある、ニューブランズウィック大学（UNB）で行います。例年通り、研究論文発表、教師研修会、情報交換会、教材展示販売を行うほか、今大会では、

パネルディスカッションも組み入れるなど、充実したプログラムを予定しています。研究論文発表は、応募の中から、24名の発表者が選ばれました。研修会講師やパネリストの先生方とも打ち合わせが進み、会場となるのUNBでも、着々と準備が進んでいます。所属学科の Culture and Language Studies は、今大会開催に全面的な協力を申し出てくれており、会場および機材の使用、参加者に配付する資料のバインダー作成、大会開催中のサポート、開会式での挨拶などの準備も順調に進んでいます。すでに、会場となる2教室、および昼食会場も予約をし、昼食やリフレッシュメントの手配準備も整いました。懇親夕食会には、市内ホテルのバンケットルームを予約し、サーモンディナーを用意することになっています。また、24日（金）には、みなさまにお馴染みの「赤毛のアン」の故郷、プリンスエドワード島への一泊ツアーも計画しています。会員のみなさまには、是非、ご参加を計画され、早めに航空券購入の準備を進められるよう、お勧めいたします。CAJLE ホーム

ページに、「大会のご案内」、「大会プログラム」、「研究発表プログラム」、「教師研修会紹介」、「パネルディスカッション紹介」、「オプションツアーのご案内」、「宿泊のご案内」、「航空便情報」、「大会参加申し込み用紙」などを掲載しましたので、ご覧ください ([www.cajle.net](http://www.cajle.net))。同時に、昨年同様、会員および関係機関には、印刷したものを郵送いたします。

## 第2回理事会承認事項7項目の一部追加・訂正及び、報告事項 (清水道子)

1. 「宣伝・開発企画委員会」の準備活動発足の承認  
一桶谷仁美氏の提案のもとに、かねて日本での宣伝開発に努められた王仲子氏と日本での広報担当を承諾された永瀬治郎氏が加わり、3名による「宣伝・開発企画委員会」の準備活動が承認された。2007年の大会での承認まで準備活動の形式をとる。また、王仲子氏がこれまで担当された日本での広報活動については、「宣伝・開発企画委員会」の一部として引き続き王氏、永瀬氏が担当する。

(Nov25. 2006-2-7 追加)

2. CAJLE 理事役割内訳 (2006. 10. 6 付) の書記項目  
1. に、④「凡人社向け販売用ジャーナル CAJLE については、宣伝・開発部の王仲子氏が担当する」を追加する。(Jan28. 2007)
3. 2007 年度大会講師招聘に関して、桶谷氏の質問に対する報告：大会委員長 西島美智子  
(Jan31. 2007)
4. 応募論文選考のガイドラインの報告：選考方法、採用基準について 下條光明 (Feb 06. 2007)

## アトランティック部会活動報告 (大江都)

2007 年 3 月に、年中行事である「アトランティック・カナダ日本語弁論大会」が、マウント・アリソン大学で開催された。(詳細については、本ニュースレター34号記載の「アトランティック・カナダ日本語弁論大会」を参照のこと。セント・メアリーズ大

学、UNB、セント・トーマス大学、そしてマウント・アリソン大学から、計 24 名の学生が参加し、スピーチを競った。他地域の大会に比べ、小規模ではあるが、和やかで楽しい会となった。2007 年 8 月には、いよいよアトランティック地域で初めての CAJLE 年次大会が UNB に於いて開催される。実行委員長のリーダーシップの下に、着々と準備が進行中である。

## オンタリオ部会活動報告 (鈴木美知子)

「日本語教師研修活動」として 2007 年 2 月 4 日、CAJLE/NJCA 共催により、トロント日系文化会館にて小室リー郁子氏を講師に迎え『話し言葉教育を考える』と題するワークショップを実施した。話し言葉教育の現状、会話・聴解教材の種類と目的、「話す力を伸ばす」とはどういうことかなど、分かりやすく丁寧に導入し、『聞いて覚える話し方 日本語生中継』を教材に参加者を巻き込んで、学習者のタイプ別、能力別教材利用方法の指導がなされた。年少者までを視野に入れられ、きめの細かい、配慮のゆきとどいたワークショップであった。参加者 39 名、「にほんごサークル」の展示販売があり、教材検討や意見交換のために休憩時間を十分に取ったことは有効であった。

「調査プロジェクト」は、その後のプラーチャレンジの経過報告が、2006 年 10 月 22 日、NJCA 日本語プロジェクト主催、CAJLE 後援により、トロント日系文化会館にて行われた。

バーバー陽子氏 (トロント日本語クレジットコース教師) により、履修単位の仕組みについての説明がされた。引き続き、受験者第一号であるグレード 10 の学生の担任教師、木部智美氏による申請から受験までの経過報告があった。この受験生はほぼ 100% に近い成績で合格、オンタリオ・クレジットを取得され、意欲を持って次のレベルへの受験準備を進めているとの報告があった。その後質疑応答が行われた。

尚、「プラーチャレンジ」については、2005 年 11

月6日に、オンタリオ州立高校の School Guidance Counselor として現在活躍され、プラーチャレンジの審査担当の高田達氏を講師に招いて説明会を開いてから、すでに1年半が経過した。現在では、その申請の過程を各私立日本語学校の教師及び学習者が理解し、個々にデースクールのガイダンスオフィスに直接申し込みを進めている。審査を受けてクレジット取得の結果がもたらされたことはよろこばしい次第である。CAJLE の調査プロジェクトとしてのプラーチャレンジのお手伝いはここで一応打ち切ることとする旨を、2007年2月4日の日本語教師研修会で、簡単に報告した。PLAR (Prior Learning Assessment and Recognition) Challenge に関する詳細は、CAJLE、NL32号及び33号年史参照。(調査プロジェクト担当：清水)

#### 今後の活動予定

2007年～2008年も新移住者協会日本語プロジェクトで2～3回に絞った活動が企画されている。CAJLE 側の開催形式は未定であるが、CAJLE 会員2名が講師として予定されている。

#### 1. 勉強会 年1回の開催を企画中

開催形式：未定

講演者：小室リー郁子

開催期日：未定

講演内容： 前回の『話し言葉教育を考える』に引き続き、会話教育についてのワークショップを行う。

#### 2. 継承日本語教育講演会

開催形式：未定

講演者： 鈴木美知子

開催期日：未定

講演内容：「家庭における継承語教育の実践面での大切なポイントについて」

### これからの活動案内

#### 2007年度年次大会

2007年度年次大会は、8月21日(火)～23日(木)に、ニューブランズウィック州のフレデリクトンにある、ニューブランズウィック大学で行う予定です。例年通り、研究論文発表、教師研修会、情報交換会、教材展示販売、懇親会など、充実したプログラムを予定しています。また、24日(金)には、みなさまに、お馴染みの「赤毛のアン」の故郷、プリンスエドワード島への一泊ツアーも計画しています。(詳しくは、本号の2007年度年次大会準備経過報告及び大会情報他ホームページ等をご参照ください。)

#### 年次総会

年次大会1日目、2007年8月21日(火)午後5時15分～6時15分、ニューブランズウィック大学、テイラーホール205号室にて年次総会を予定しております。多数のご参加をお待ちしています。詳細は、「年次総会ご案内」をご参照ください。

書記 清水道子・畔上ラム

**BULLETIN BOARD**

早や六月が巡ってまいりました。カナダ、US、日本、そして世界各地の会員の皆さま、いかがお過ごしでしょうか。当地カナダでは、これから昼の時間が一段と長くなり、夏至のころには夜10時過ぎまで明るい・・・という楽しい季節です。日本では、梅雨のうっとうしい時期が始まりますね。どなたも健康にご留意されますよう。

ニューズレター34号の初稿を拝見。今までにも増して充実した、バラエティに富んだ記事——「日本語弁論大会」の特集記事、今年度年次大会に関連しての「赤毛のアン」寄稿、リレー連載、等等——が満載されて、きっと読者の皆さまにも、楽しみながら、種々の情報を吸収していただけることでしょう。

CAJLE 最大の行事である年次大会の日も、着々と近づいてきました。大会実行委員長西島美智子氏のパワフルなリーダーシップで、まずは企画準備が完了。すでに皆さまにも、ホームページで「大会のご案内」その他を見ていただけたかと思えます。アトランティック・カナダで開催する初めての年次大会。新しい視点で日本語教育を考える、また、CAJLEの今後を考える、よい機会となることを確信しております。プリンス・エドワード島へのツアーにも多数参加いただき、カナダ東海岸の自然と文化を体験していただければと思います。

では、八月の年次大会でお目にかかれることを楽しみに。皆さまの引き続きのご活躍をお祈りいたします。

会長：大江 都

**《会 員 規 定》**

カナダ日本語教育振興会は、カナダにおける日本語教育の発展と向上を目指す非営利組織です。日本語教育に関心のある方ならどなたでも会員として登録することができます。

会費年度：2007年6月～2008年5月

年会費： 連絡先がカナダの場合…CAD\$40.00、アメリカ及び南アメリカの場合…US\$40.00  
上記以外の場合…US\$60.00 (いずれも郵送の場合は小切手または money order で)

申込必要事項： 氏名（日本語およびローマ字）、現住所、電話およびファックス（自宅、職場の両方）、電子メールアドレス、所属機関。

申込先： Canadian Association for Japanese Language Education (CAJLE)  
P.O. Box 75133, 20 Bloor St. East, Toronto, Ontario, M4W 1A0, CANADA

お問い合わせ： E-mail: tonami@rogers.com (渡並)

(入会申込書は、ホームページをご覧ください。 <http://www.cajle.net> )



**編集部便り**

★ 初夏も間近と思われる五月二十三日、ロッキーの麓カルガリーに大雪が降った。新芽が寒々と雪の下で震え、雪の重さで、折れた木々も何本かあった。ニュースレターの校正に力を入れていたのはこんな時期であった。にもかかわらず、意義ある原稿の数々、夏の年次大会の報告もちゃくちゃくと入り、ニュースレターの準備は楽しいものとなった。欲を言わせて戴けば、PEIへの旅行を控え、「赤毛のアン」の投稿がなかったのが残念だった。(ライリー)

★ 電車の中の乗客ウォッチは東京での楽しみのひとつだ。今回の発見は学生から二十代後半までの女性の内股歩きだ。フォーマル、カジュアルを問わず、足を広げていても、いつも膝が内側を向いている。これが画一的であり、何ともぎこちなく見える。「人は見た目が9割」の著者、竹内一郎氏はこの内股歩きを「可愛い女の子」のポーズとよぶ。竹内氏によると、このポーズは少女マンガなどで広く描かれており、「女らしさの象徴は内側に向けた足。…舞妓さんの歩き方…。従順の表明である。パーソナル・スペースを狭くしてでしゃばらないという印象を相手に与える」らしい。これが日本人男性の求める女性像なのか。又、そういう男性におもねる女性を思うと何ともやるせない。こんな気持ちを後にしてバンクーバーに戻り、校正にいそしんだニュースレター34号だった。(竹井)

★ 今号の編集作業は、日本滞在中の編集長からの遠隔操作（失礼、「号令」でした）により進められました。一時期は私以外の編集部員が日本滞在中ということもあり、カナダにたった一人置き去り状態だった私は、なんとも淋しくまた妬ましい思いを抱きながら校正を続けました。そんな精神状態での作業で『ムラが……』『見落としが……』『辛口すぎ……』などと心配しながらでしたが、学生の引率で毎日超多忙の編集長はじめ全部員の協力の下、今回も編集の最終段階に漕ぎ着け、ほっと一安心しているところです。さて、出来栄はいかがなものでしょうか。今号に寄稿していただきました執筆者の方、会からの報告を受け持ってくださいました方に感謝いたします。8月の年次大会で皆様にお目にかかるのを楽しみにしています。(杉本)

★ 勤務校から20名の学生を連れて東京にやってきた。わずか一ヶ月の滞在なのに、生活してはじめて観察できる日本があった。心細かい配慮と、けっして騒がないが、確実に役目を果たすという、日本人なら当たり前とされる仕事ぶりには、何回となくすっかり感心した。クラスの初日に、学生たちが教室までのわずか10分程度の道のりを間違えるのではないかと、四人のアシスタントが学生名簿を片手に道端や教室ビルへの入り口に立って案内し続けた。おかげで一人の迷子の存在にいち早く気づき、わたしがその学生を連れてくるまでだれも所定の位置から離れなかった。一方では、これから数年先にわたっても記憶に残るだろうと思われる出来事にも出会った。はしかの流行との警告が出て、大学全体はあっさりと二週間の学校封鎖に踏み切り、学生たちは宿舎の中にある教室で授業を続けることとなった。昼になにげなくテレビを付けると、戦後初めての現職大臣自殺のニュースが飛び込んできた。しかも時はまさに予想外の日本映画のカンヌ映画祭大賞受賞で、そのタイトルがなんと『殞（もがり）の森』。このような日々の中でこのニュースレターの編集を仕上げ、これまでとはずいぶん違う思いをしたことを記しておきたい。(楊)